KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
96
1185
2

ヲ6
1185
2

長崎聞見録巻之二

目録

唐帝都之事
唐船
唐人風俗
唐縮ふ紋の事
唐人技業事
陰明齋洋学理の事
唐人の絶事
唐人空船
寧波
船揚(ちゃう)されし事
附舟蓋(ふなぶた)の事
船綱紙製の事
李仁山医案
唐の婦人
唐人毛刀(ひたく)の事
唐古藁(こうこう)の事

ぜんざい餅の事　唐人幽靈の事
唐人流行の教事　唐人生花の教事
聖堂　講堂之額聯
唐人墓　阿蘭陀人之墓
東海之墓

長崎聞見錄卷之二

唐土帝都之事

乾隆帝より都を北京へ順天府と云。是殘國の燕の地にて。寒國なれども。要害堅固第一の地なり。都城の周廻三十六丁一里に積りて。凡七里あり。宮殿殿廊を重ねたる云。日本にて云ふ。まづ南京へ陸をゆく四十日路あり。其間は舟にて往來す。也。陸路にて南京舟にて。此所に舟にて。座敷に坐り去りたるものなり。扨北京を唐土第一の上國にて。氣候暖和人物温寛なり。天下の親族は北京へ集りたるなり。其間廻十七里。戸數凡一百九十七万。人數四百九拾九万餘。是蘭の地

寧波

寧波は。日本への渡口なり。唐の代よりそへ。明州と号とる地なり。古へ日本より渡海の船長崎に所へ来るなり。此上なき繁華なる湊にて。人家凡六万戸。富豪繁華の地へ。七隻へとなる唐船。あくへは寧波より出帆とる。行きの地の舟にて。此地ふきなり。順風を待く船数をとるなり

唐船

唐船は。三階なり。上は階へ板にて造り結。西洋にて漆をてと塗る。入口は漆きなり。漆を入れ塗るものなり。此所帆の揚げ降し。清国人働く場所なり。その中だんへ客人の部屋くあり。そは花の間を模倣船へ外ふれば。長崎屋敷なれども。疎略なる薬なり。丈夫第つふ

ちるものなり。左唐人の部屋くるどへ。ふか縫おありて張りまつ西洋なりどへ。さて船の表面と思へ所よ。ちるは四面板。海紀ゑ間見なりて。傾みと結ふなり。絹紙にて張。揚仕舞なり。梅ヶ崎と云所引付場なり。唐人彼所へ入なり。船を繋ぎ。日和舟利船乗船の船なり。船へ造りなるは大名紙面ぎなりゑ部紙さくるとぞ。まと船の縁を押。おれる彼地へ費長崎のゑ綜あるく。此所より出る荷のなり。唐人をつく大切なる荷れなり

唐船の器圖

舟揚り之図

紅菩薩の支

長崎にまゐる唐人を菩薩と云舟祝あり。媽祖婆婆。偽人共時。福建興化の林氏の娘。大海に投して祝とする。神と共に崇敬して海難を護ぜんを天妃と云。媽祖婆婆も号也。観世音の化身なりと云。薩摩の宝神なる相現也。所媽祖祝なり。野辺に焼物の祝あり。紅菩薩へつまく。此舟祝を先有る祝なるを以て紅菩薩へつまく。此舟祝を先有る祝なるを以て紅菩薩へつまく。此舟祝を先有る祝なるを以て紅菩薩へつまく。此舟祝を先有る祝なるを以て紅菩薩へつまく。

唐人の風俗

唐人の風俗を。實厚なるまゝ。強て奢用なる人。作りすぎたる風と。大勝を集る。祝るゝ所ゝ。唐人の墓石のごとくなる。日本の石より一回りもおゝきく。よゝむりとなる。それ平にして。日本乃ゝ。抜て撰なるあり。抜て撰を扱ふなり。又茶盤とゝるふ。盤拉代用とする半。切りにくきを製なり。実ととゝつく。盤拉性来の石を四人。日本のゝく。平角を重ず。彼地の人強く拘を急迫なる意なりと云。此一二点代作くも。彼地の寛緩なるを知るべきなり。たゞ厭ふ潔なるなり。或人客なるゝ。時くゝ布小湯を浸。肌膚を拭ふのなり。又厠なるなり。ゝと雇ざる者なり。

ゐり。又ものを掬ひ取ることの〳〵て。頭にぬぐ事の新。又頭を洗ひて髮梳しく。食と鄙ゝる類と。花時鄙賤のもてるるもの。日本にていうける鄙猥のものまぐもの。よく潔ふ潔のかあり。拭きハ藻をもふふ際るるの多の紙を以て拭く唐人も。日本を清潔と好る國なりとの。手揚きたるるハ文美なり。又首なるもいれど。自然に及ざる所あり。唐人自己の國を又國なりとして自慢とする新を熟〳〵考へ。是ハ悪べきものなり

唐人食物

唐人生冷の物を食ものとひ。魚類及び紹興漬等をもてゝ飯を食べ。獸魚と考るふ。あるひハ一日。或ハ一昼夜と考る事なり。紙地ハ。彩の爆さたるとを好む。唐人ハ新の生〳〵を好。生〳〵ハ竟やうふ蒸。爆さたるハ悪事と考る紙ばかりの有るなり。さて〳〵新鮮なる生〳〵ハ。油を汲くとり灌ぎて。物を。是を以て考るふ。彼地を和つく宮ものなるものとの久事なり。此地の風俗ふて。ハ。行ゆくの大家ものを。第一油紙灌ぐハ。ものを。直ちに。ものを。拭きと拭なへ。鶏ふ砂糖と調和して食ふ。是保養のなるなり。屋敷ハ。ものつく盛膳して。鶏鴨魚菜等十餘味あり。男婦一〳〵食ふ。紅毛人ものハ。婦人なる多つてハ。蒸食やしゝ。是男人なる抑なる所なり。其ハ元来て粗なるひなるものなり。彼地より和なるなる。搗蒸まぜ。此地の米をもて食ふ。其時ハ。麦湯を用ひ。さく。其のち考へく食ふ。ものゝ。ものゝ。彼地の口腹ものを。是ハ日本人の嗜好ものなり。彼ハ日本人の嗜好ものなり。彼ハ〳〵食ふなる所く。彼中腎油〳〵。宜〳〵。ものなり。

唐人の便の事

我國は訓を以て譯する故辨じ。唐人は韻をもつて万事を通ずれども。音韻をもつて
するゆへ其の微妙なるに似たれども却て通ずるに便なり。音韻の訓を用ゆる事能はざる人は長崎に
あるところ唐人應接なる事に仕形を用ひ。仕形を以ては通ぜざる事多ければ
通事たり。何となれば。彼地にても。韻の通ぜざる所あれども。空に書して譯するなり。
殊に彼國にても。言語異なる國は其韻法麻あれば。通じがたし。空に字を書て
仕形を以て事を通ずる也。其故に唐人は字を書くなり。年々長崎に来る時。
長崎に渡り。年々帰郷を遂げざる者もあり。此唐人長崎御役所にて宗静にして。
諸事速かなる事の旁なる故に大きに厭じて。長崎の事に能通じて居るなり。我
國の庭まで。縉紳政事の命令なるにも。言語を容貌を以て変ずる事靜かならず。
況や理論を決めるにおいてをや。却つて動躁し。漸くに事を決するなり。

我國の役人言語諸事閑靜にして通辨遲々なれば。厭ふ事に堪かねて怒り
けるとなん。彼紅毛は學者なるを以て。其厭ざる條に實する故論りあらざるなり。
其他の唐人は。此國にきたり。年々人厭ずる事なかりても。自ら慎しみとしく。
自ら此國の。風俗を知るなれば。騒ざるなり。

唐人舟綱を製する事

唐人船の綱を製するには。官府に届け。廣き町を借りて。四五拾人も出て經日
動躁して漸くに成る。又紅毛人の綱を製するは。其船の中にて製する事なり。
風とうゆへ其の轉ずる事に隨ひ。更に操して綱に成る一向人力を労せざるの巧なき
なり。蓋此長崎の某。唐人は綱製すること多く。蠻人は労することなきを見て
ありしを。唐人答て云。阿蘭陀は小國にて理を窮ち故に人力を省き

ざれバ其国立がたし。大唐ハ大国なれバ人多くありて、自然と病人する事
多く然り。是を小国の風俗にくらべて、人情にて病人の国窮
ならむ。おしなべて其国にても此風俗なるかぞ知れざるべしといひ
けるとなん

唐人服薬

唐人病ありて、即彼地の医師の薬を調剤せしむるに、いづれも大剤にて、
凡三拾匁計なる調合せるを煎じもちゆ。その分量は飯碗と一飯碗にして、大てい
日本の四合を二合に煎じつめる也。薬の剤は皆大きなる事なれども、気間く
薄く製したるゆゑ、日本の薬力程にては中々効くべし。別に彼地にて用ゆる薬
力あり。其法を後に出し置けり。又唐人の好みによりて、日本の医に診察を請ふ

事あり。此時は珍器絶ず。其病症と薬方薬味等まで書記してみせける。
唐人薬品の佳否、製法の仕方までくらべける人参種々又は何地の産、麻黄は何
方の産と用ゆる也。唐人其品をみんと請ふ。彼地より来る物を渡り来る。陳紅
好む薬品をえらみ用ゆる。此品は桑葉ならで、自己の手より薬味等を出し
て調剤を請ふ也。或は又大黄茯苓等の物を見てする事なし。
逆湯に備へおきたる薬品よりは、實に雲泥の相違あり。是故に巻あらず。
凡日本より渡るものは、彼地にて法なるもの、日本向にて定めなく、服さしむると
みへたり。又日本の人病ありて、彼地の医薬をもちひるに、唐人なりとも略
薬を記してみせるなり。其調剤をみるに多くは一味配剤をもちひず
て信仰するもある也。其思慮に随ひ服すれば、しるしありて人参にて自然なるなん。

李仁山醫案

濵町。惣兵衛児三歳。痒後木便瀉。木約是脾胃失其運化。法當後衰弱而瀉自愈。但多目瞪。有慢驚之兆。倘發慢驚。即醫伎窮矣

人参 二分　焦白朮 五分　製半夏 五分　炮薑 三分　炙甘草 三分

陳皮 五分　白茯 八分　廣木香 二分 湿紙包煨透

一婦人寡居多鬱。月信太多。近徑期反失矣。若執筆手振顫。此必去血過多。肝氣衰筋失其養。内經曰。手得血而能握。今手不能握。明係血虚。況振動為風木之象。當以肝經血分論治。

製香附 三錢　白茯 去皮一錢五分　焦白朮 一錢五分　帰身 酒洗一錢五分 三錢　枸杞 二錢

條黄芩 一錢　黄栢 酒製一錢　甘草 一錢

煎服或蜜丸服

陸明齋浄瑠理のこと

陸明斎と云唐人ハ。長崎へ時々来りしが。此地の言語をも能通じ。浄瑠璃をもかたり習て彼地にても賓客ある時ハ。此陸明斎を雇ひ。日本浄瑠璃を語らしめ。客の興とするなりとぞ。浄瑠理ハ始めて遊女に習ひ覚へし。忠臣蔵の三段目迄をみな語り。其外の唐人とも深く流行し。此時陸明斎が舟より送りし事も。此浄瑠璃人の唄ふなどをも聞て能く送られ。陸明斎が宅ゟ来るに。此陸明斎ハ殊に日本好にて。其宅にも日本流の席ありて。揺拡するを日本物を用ひ。日本料理にて客を本国に招くると思ふべしと。多く客を遊ぶるとなん。近頃中婦人とともに。右陸明斎が娘なりとて。十二三の者を是のを出して華やかなる事を見せしとなん

唐の婦人

我国の女時々漂流して。唐人長崎に来り来る。其漂流人の噂を聞くに。彼地にては纏り小婦人抔は大道を徘徊せざるの由を以て往来にて婦人を見る事は稀なり。但婦人は手の小手足までも細小なるを称美とするにて。其足抔は老人に至りては別して細小なり。押離者ては歩行もいとむつかしげに見ゆ。婢女に左右より扶けられ行くものなり。漂流人の南京抔にて逗留の時分。日本人をみんとて男女見物に来るが。其中に来る若き婦人は皆左様なり。扶助にられて来るなり。其見物の人多き時は手に菓子のやうなるものを包みて来て小児抔にる小児に餅りありとぞ。又彼地にても貧人あり。洗濯婆の様なる者来て衣類の洗ひ濯ぎを為る事なり。日本の婦人の如き十四五歳を老せば別る時に停午に洗濯して是るなといふ

唐人の蹴事

唐人力量極めて日本人に劣れる事遠き由。実を以て彼地にても日本人壱人に七八人をあたると云ふ。去ながら身軽く履にて蹴る術は日本人の知らざる事也。彼地は総て此術あり。日本人は此術には遠く附て一蹴すれど。唐人は弱き者も蹴得し。嘗て船の婦人に蹴られたる事あり。郭ら船頭人壱人にて日本人七八人も蹴られ蹶倒せし事ありしといふ。実を以く唐人と事は論ざるにては先を蹴べきとぞ。得べからず。此蹴るを考ふる者は七八人あるべし。二三十人までも容易に敵伏させざるなり

唐人非力の事

唐人力量弱き者にて。此地の者の據ふ三分の一にも足らざる程の。物を撲ひても流汗とぞしく。僅に十歩二指歩めば喘息をなするなり。実を以く麦藁抔の篭を持を牛に結揺して。天秤なるを人に持ちて動作貧賤なる仕方なり。

唐人空侯

唐人空侯ありてそ琵琶より信用せらるるなり。爲て程赤城といふ唐人なる。今を言る裏既なるに所くあり。此唐人七絃の琴なるもの中異なる形者の形なりと云ふ。撥槫多といふものありと言ふ。そ形ゆと尋ると言く云たなる撥槫の如く。然して能くそ云ふ。そ後撥槫多拾遺と此事紙ちきりに形なきに空侯なりと云ふ。此程赤城拾遺を見るに。唐人の中まくたおしく文なれ。ひり。書拾と出るとうまる程のちまても。幻字異なる出ぬなといふ。いとんやそ他の唐人の説なるに。仕用をべらざるなるみなたり

唐土の藁火事

唐土の藁は膏澤なるく拵き易くく。繩拵に製して久しく保ちぐるを教ふ

膏澤なるを以て久く考るに幼ある。唐人此地の藁火鬼に成して繩拵に製して強く捆法なるとうて秋漢なるなり

ぜんざい餅のこと

唐人鶏肉に蒲鉾或は面麩等を拵といふ。番菜と出しなる書書屋あり。俗名論語屋を磨して作る。そ國に問ふて此地の餅と違ふを拵拵に彼肉と書面るをきり。やう拵本と唱へ。捆る者をを学て味へるるり。殊に唐人なるを祝して此時に恐れ餅と書就とる。そこで此時の人も是を到く。せるうを知りてとるるなり。唐人通知ふ所なる客を拵とるへ此時者は彼ぜんざい餅とるるのなり。そ仕れ此紀とて異る是なく唐國を知りくく。陣九のくくを。即唐人の製とる形なるをのなり

唐人幽霊の事

唐人は幽冥の沙汰をよくしるものなり。唐人館内にも幽霊堂ありて。彼地にて縊りたる幽冥
ハ此地にて傳ふ。便やかなる幽霊となりて遠ざかる。一身全体ありて。殿の響などあり。
までも。其ハ彼所にて逢ふ。某氏の所にてえらといふ孫の之。勿論癘鬼ちるふハ是と
るなれども。又大海に浮み万里を隔て空しく死たる者などあれバ。其遺恨を留て
昔時唐人に博識多智の学者ありし事なり。其名ハ忘れたり。潯陽の人にて唐人の学にきうぜん事を
官途に就かく通詞某の宅に寄寓せしが。数月ありけるに。其家の娘に通じて死たる
かの先生毎夜此蠣の隙よりして濃艶を窺ふ。主人おやしみて見るに。其夜は日本の
むすめ。然りと言ふ。主人の日本にて中々容易なる事の。幽霊といへることはなきことなりとて。縊られ。彼生
不思議なる事人の世にたぐひなきことなり。早速此先生ハ彼地にても幽霊実のあることを

らんかりくしたるなり

唐人溺れんじやう

唐人ハ国に来り。死たる者体く多きまでハ。館内動ともすれバ幽霊徘徊するとて。中々
僧衆となるも。一通りの言んぎやうハ。一局縁りたる舟ハ作て。諸菩薩摘諸鬼摘にして
紙指して作て。館内ハ唐人寺の僧を招じて。讀經祝儀し。其後館内を出し。海辺に
持行て焼捨るなどの文にて催すなるとしたり。是ハ家をあるべし。死舟ハ二艘造り。一ハ
出舟。一ハ入舟なり。出舟にて死くるは出舟に供して弔ふ。入舟にて死したるは入
舟を以て弔ふなるなり。此船に諸菩薩諸尊具家鎮するなるなく。其乃小子を
積くく。つかとして闘かるなしなり。作るとしてもとへ其費戌る拾金両
多るほど入るなるなり。此紙ハ。彼の舟の船を茲に海にて浮ばせ。千里のよしとも漕ぐ

の氏族すべて金銀とるべし。喇叭と吹くべし。人間のふるまひをみくびるべし。
高慢といふ。唐人とる揚子。それ船を岸に引せ火紙をもつて焼くべし。一人くに三ぶ〜て退くべし。
焼きつるなり。はじめ唐人船を白ひ。といふ者あり。思紙多紙を布と頭にまき。柿をもつて金銀の柏ふ
酒ひ。思紙の煙草作りて柿を焼くまはるべし。

唐人生物を殺さず

古人曰紫蓋の宝を入くべし。ゆえに人の言思
ちりふみひ性となるものなり。唐人紙紙ふの人をたきべき事煙かつく
よりはみ仏くり。人の身体ちり血のいぢるとなきなり。眉をたちめくべる。或
ち友人れるべきなる人の死ちとるふ達人べをる禁令動果〜てかるべし

ちるふ鶏鴨一切の生物を殺さず。野菜紙切るべし。是紙國の人傷
まべくちふ所なきなり。唐人久仏くく思ぶ。又仏事紙作るふ。
國の人名付文を殺生紙禁ず。唐人ちるなり。彼仏事作者るなるふ
と。思船を鶏の雛紙れるなる紙せるべし。焼すつるを。火烟その
生物のところを及びぬきべ。焼物の表〜思べ〜ざる義。唐人安
さるなり。是化ふ〜。只ひ性をるを紙をのるる。文る曰。里三ハ仏を
ふ〜〜と。たべ善るをふべ〜。別く悪にをぼく色〜ざるなり

明倫堂

沈涵

□

乾隆辛巳孟春之吉

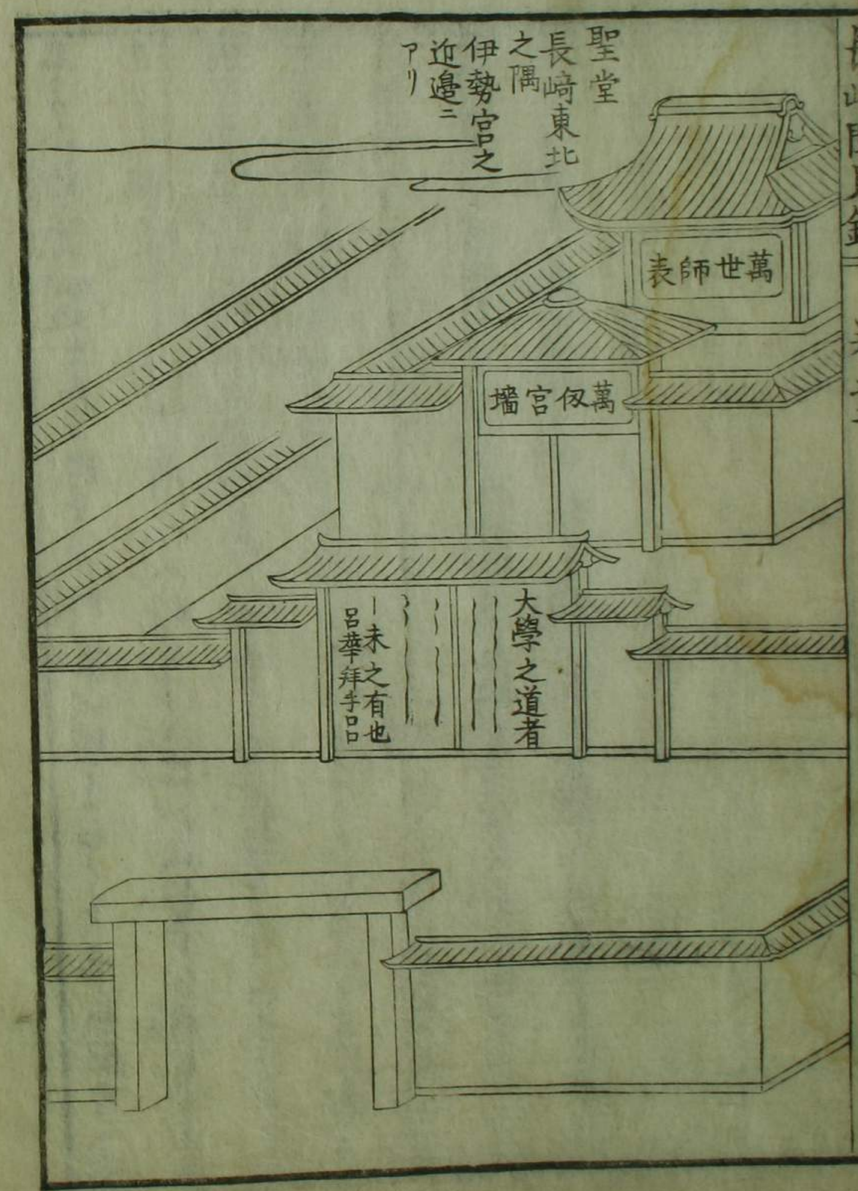
萬世文章祖

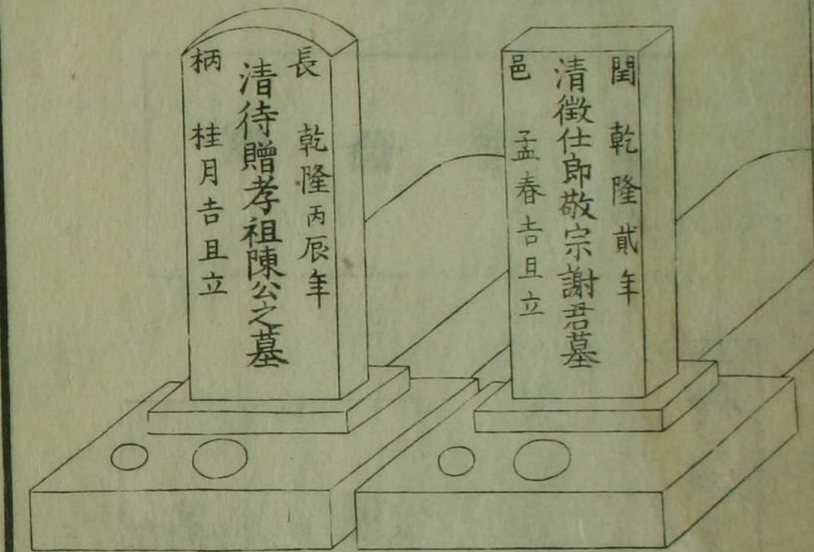
歷代帝王師

雲間孝先敬書□□

集大成德超群聖

仰彌高道配上天



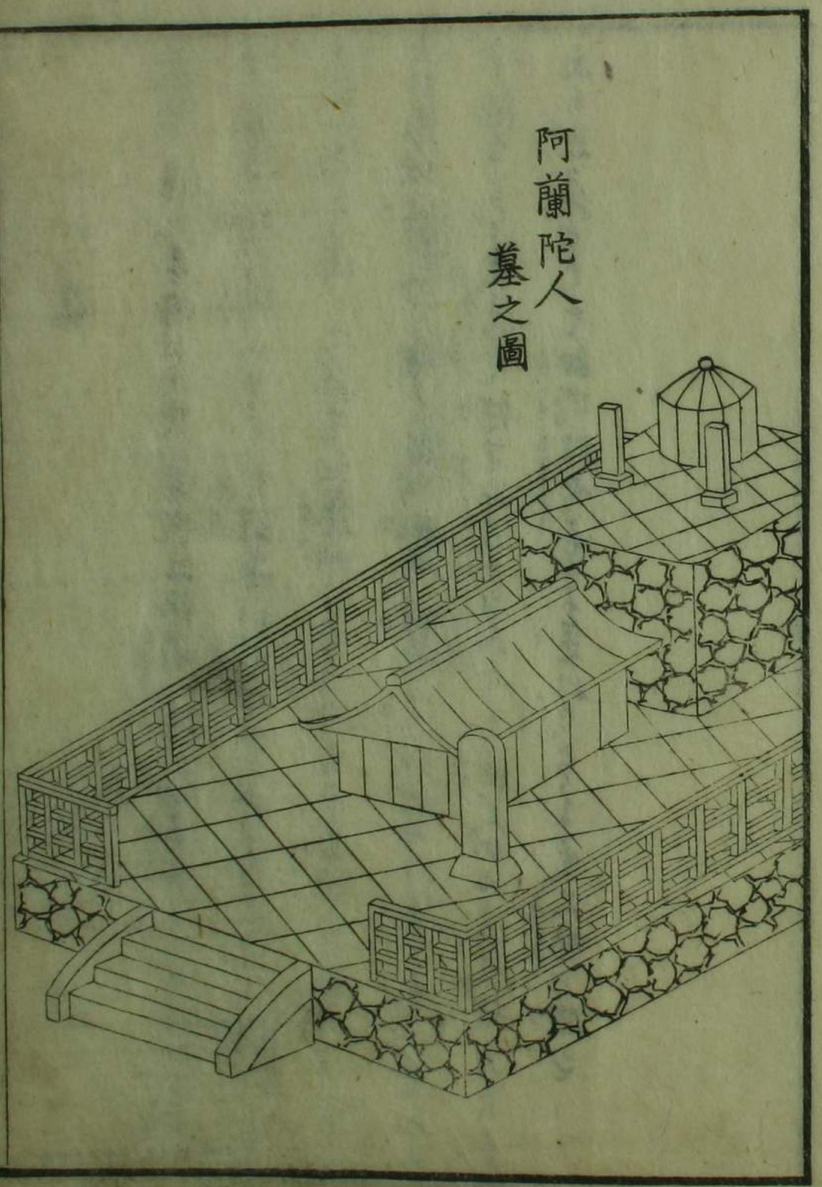


唐人の墓

唐人の墓。崇福寺。興福寺。福壽寺等に多くあり。墓の後。棺を埋むる所なり。皆石を以て築き。亀甲の形を為す。

阿蘭陀人の墓

阿蘭陀人は墓を。也爲稻佗邑。猪苗寺にあり。苔時カピタン。舟中にて死すれば。砂糖漬にして持帰り。山もるに葬る。其墓あり。ひとりカピタンは。男女共に。死骸を地の底に。墓にうつもり。大馬の死するふ葬しく。其他は。海中にて死すれば。海中に投るとうん。或は其カピタンの墓と。番花とを。向ふとうふ事なり。其ごとその思ふ所ふ所りうる妻婦など。墓碑するのことうんと。同じく。墓さえ宮を敷と云ふなり。墓のまへに三ツ石式を立て。其ハ方に。俗より事のよう〳〵祇紀〳〵なる石なり。家式を。同じく。僧宮にて敷なり。右う〳〵是を。ちうか磨滅して。ひんべんなる墓の形を。なる墓と



阿蘭陀人
墓之圖

東海の墓

東海は墓なり。去侍るころあり。昔は東海某の人の子孫にて。長崎の代官なり。此人墓なくなる癖あるとて。生涯墓を修理成志をなすとぞ聞く。[illegible]

東海の墓を侍りて。名を記墓なきなり。今もそこの子孫あるなり。[illegible]

その墓なくなるなり。すべて石なくなり。[illegible]

今は盗まるるとも。更に[illegible]盗人の志めなり。[illegible]

あり。志なれどもそこの巧。[illegible]

東海墓之圖

長崎聞見錄
卷之三
江山常綠

長崎聞見錄
卷之三

長濱國見孫崖武作